

# デーリー東北

2020年(令和2年)10月15日(木曜日) (25)

## 31日ブレイズ公式戦レフェリーデビュー

# 大病乗り越え氷上へ

### 大坊さん(ハ工)憧れの舞台

大病乗り越え、憧れのプロ選手と同じリンクに。八戸工業大アイスホッケー部主将の大坊和希さんがアジアリーグのレフェリーとして、今月31日に行われる東北フリーブレイズホーム戦で公式戦デビューを迎える。八戸工大一高2年の時に脳腫瘍が見つかり、長い闘病生活を経て氷上に復帰。フレイ以外でもホッケーに携わりたいとレフェリーとしての技術を磨いてきた。大坊さんは闘病中にお世話になった人たちに、競技を通じて恩返しをしたいと意気込んでいる。

(向屋敷明)

大坊さんは八戸市出身。小学1年でアイスホッケーを始め、中学2年時には16歳以下日本代表候補に選ばれた。将来を嘱望される選手の中で、自身もプロを志していた。しかし、高校2年の春、突然病魔に襲われた。「物が二重に見える」。病院で告げられたのは、脳腫瘍という考えもなかった病名。「家系にがんを患った人もいないし、ただただ驚いた」。診断の1カ月後には症状が急激に悪化。記憶がなくなるほどの頭痛と、耐え難い吐き気を催し、救急搬送されると水頭症の併発も判明。その後、仙台市の大学病院に移った。腫瘍の摘出は丸一日に及ぶ手術の末、無事成功したが、次は抗がん剤と放射線による治療が待っていた。「めっちゃくちゃんどかった。抗がん剤治療が始まると、吐き気や倦怠感で動けないし何も食べられない。治療のたびに体重が5kg減った」と、当時の壮絶な闘病生活を語る。

闘病中の支えになったのは周囲の励ましだった。1年に及ぶ入院生活は母子秋さんが付きっきりでサポートしてくれた。工大一高の仲間はヘルメットに大坊さんの背番号「19」のシールを貼り、練習や試合に臨んでいた。「チームに自分の居場所があると感じてうれしかった」と大坊さん。親交のあったホッケー関係者

## 多くの励ましに感謝「恩返ししたい」



チームメートやブレイズの選手たちが励ましの言葉を寄せてくれた横断幕と、ユニホームを手に恩返しを誓う大坊和希さん＝14日、八戸市

がメッセージを寄せてくれた。大切にしている物がアレイの横断幕は、今でも部屋に飾っているという。横断幕と共に大坊さんが

「息子を元気づけようと、仕事でつながりのある父直樹さんがチームに依頼し、贈ってくれた。」「リンクで待ってる」「一緒にホッケーしよう」。憧れの選手たちの言葉は今、選手とレフェリーと立場は違えど、現実のものになった。「同じ氷に立っているのは幸せなこと。治療を頑張っ

て良かった」1年間の闘病生活を経て、競技に復帰した大坊さん。それから3年。プロ入りの夢は断念したが、今はレフェリーや母校・湊中でのコーチなど、フレイ以外でもホッケーに携わる道を見つけ、アイスホッケー漬けの日々を送っている。

「今の自分があるのは、感謝と、アイスホッケーができる喜びを胸に、憧れの選手たちと共に氷上を駆け